西三河支部

ノーベル賞の話題に、ふたたび湧く スーパーカミオカンデと神岡鉱業(株)を施設見学

神岡鉱業(株)の方と参加者一同

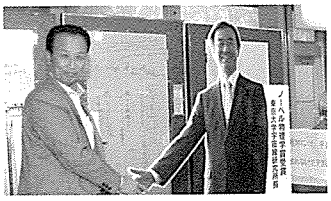
西三河支部（近藤千雅支部長）は11月29日(日)・30日(月)の日程で、支部会員20名が参加のもとに、ノーベル賞受賞の話題で沸くスーパーカミオカンデとその鉱山主の神岡鉱業株式会社（岐阜県飛騨市神岡町鹿間1番地1）を見学する施設見学会を開催しました。

参加者は午前7時40分に名鉄東岡崎駅前のロータリーに集合後、観光バスで出発しました。

1日目は北陸自動車道白川郷インターで降り、世界遺産白川郷で合掌造りの集落を見学し、午後から高山市内を各自で散策しました。

2日目は朝8時30分にホテルを出発し、施設見学先の神岡鉱業(株)に向かいました。

当日、偶然にも同社前にある道の駅（宇スカイ）で梶田隆章氏のノーベル賞受賞をお祝いして、等身大パネルの除幕セレモニーがあり、そのタイミングに遭遇、その様子がNHKの取材で全国に放送されました。

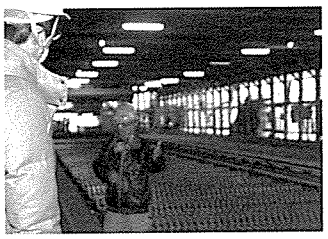
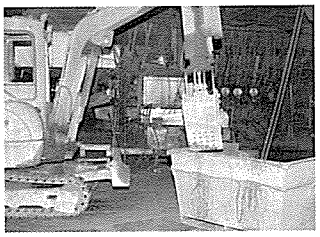

等身大パネルに握手する近藤支部長

神岡鉱業(株)は、もとは三井鉱山の流れを組むもので、三井金属(株)より分離独立した会社です。鉛の精製とその設備を利用し、現在では自動車の廃バッテリー、使用済み携帯電話、パソコンの基盤等を原料として鉛や金、銀、プラチナ等の希少金属、プラスチックのリサイクル事業に転換し、資源循環型社会のトップランナーとして走り続けています。まさに都市鉱山にふさわしいリサイクル工場です。

会議室で金属リサイクル工場鉛精製係長の田中典之氏から説明を受けた後、2班に分かれて廃バッテリーの破砕、溶鉱炉、鉛電解を経て鉛地金になるまでの工程を見学しました。

神岡鉱業(株) 田中係長

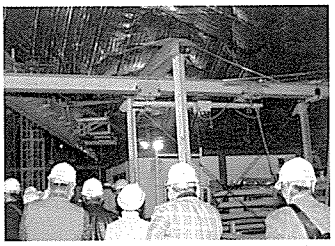
工場は勾配のきつい山の斜面に張り付く様に施設群が建ち並び、足元が大変な場所でしたが、大企業が取組むリサイクル事業の事態を肌で感じる事が出来ました。



鉛電解工場、溶鉱炉を見学

午後からはそこから30分ほどバスで登ったスーパーカミオカンデ（東京大学宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設）のある鉱山入口に到着し、トンネル(池の上／標高1,396mの山頂直下)1,000mの場所にある実験施設を職員の案内で見学しました。

この施設は体積3,000トンの超純粋タンク内に1,000本の光電子倍増管を設置したもので、ニュートリノ天文学という新たな分野が誕生しました。

スーパーカミオカンデの巨大な実験棟の中心部まで入り、様々な検出器較正装置やコントロールルームを見学させていただき、貴重な体験が出来ました。


スーパーカミオカンデのタンク上部で説明を受ける。